

倉敷市長がメッセージを託す

倉敷支部発足記念日中友好の旅へ

倉敷支部の発足記念企画として取り組まれている 北京・西安友好の旅には、参加者17人になり締め切られました。

この4月20日から5日間の旅へ、倉敷市長からメッセージが託されました。

このほど倉敷市へ合併した真備町は、西安市の長安区と友好縁組を結んでいましたが、倉敷市とも友好縁組を結ぶことになりました。倉敷市の友好の心が届けられます。

倉敷市長 古市健三氏のメッセージを披露します。

長安区 楊立様

この度、大森久雄日中友好協会倉敷支部長を団長とする訪問団一行が、御地を訪問されるにあたり、倉敷市民を代表しご挨拶を申しあげます。

本団は、日中両国民の相互理解と友好を深め、両国関係の発展に寄与することを目的に、昨年12月に倉敷市民によつて設立された民間団体であり、その結成記念として、本市と友好交流提携のある貴区を訪問するものです。

本市といたしましては、こうした市民による訪問は、両地域の交流の発展にとりまして大変重要且つ有意義であると理解しております。

つきましては、ご多用とは存じますが、本団が貴区を訪問いたしました際には、貴職をはじめ、貴区の皆様の御厚情をたまわりますよう宜しくお願い申し上げます。



長安のランドマーク的存在の鐘楼

倉敷市長 古市健三

この度の本市市民による貴区訪問により、両地域および両国の交流が、今後一層発展しますことを希望します。最後にになりましたが、貴職のご健勝と貴区の益々のご発展を祈念します。

2006年 3月22日



北京・瑠璃廠

ついに百万筆の目標 達成！

全国15地域で起こされている残留孤児裁判。全国の署名目標は「百万筆」でした。

このほどその目標を達成しました。この集計後もぞくぞく署名が届いています。皆様のご協力に感謝します。

この署名は、5月23日から開かれる全国統一行動日に、内閣府へ提出されます。

洛陽市・岡山市の

友好都市縁組の凍結解除

岡山市と洛陽市との友好都市縁組が一時凍結していましたが、このほど解除されました。ことのいきさつは次のとおりです。

岡崎平夫、松本一、安宅敬介、萩原誠司、と4代にわたる市長の在任中、友好交流が進んでいました。しかし前市長萩原氏の時に台湾新竹市との間に、都市縁組が結ばれました。その際、

するとまだ十分ではありませんが、社会的な活動として認められたこととしてみなさんに報告します。

山陽新聞

社会事業団から

山陽新聞社会事業団へ補助金の申請をしていましたが、3月29日來年度の補助金が正式に決定した旨の連絡を受けました。

來年度8万円の資金をうけることになりました。

日本語教室の諸活動が、社会的に認められた大きな一歩といえます。

総社市が補助金

総社日本語教室へ

総社市もこのほど市の予算がとおり、年額19万2千円の補助金が下りることになりました。週二回の教室運営の努力が認められたことになりました。そのほかに、小学1・2・3年生の国語の教科書も、届いています。

日中友好協会岡山支部ホームページ
http://rizhong.web.infoseek.co.jp
新・メールアドレス
rizhong86@hotmail.co.jp



太原の双塔寺

これを喜びの声で迎える 岡山県華僑・華人総会「からの声明文が、協会支部に届きました。岡山市民各界が、日中共同声明の精神を守ろう発展させようとする声の勝利であり、日中友好を正しい歴史に取り戻す闘いの勝利であつた」という声明でした

次回の新聞発送作業は
4月11日(火)午後1時半、
民主会館2階で行ないます。
前回お手伝いくださった方です。

山内和
澤内竹

「特権的な満鉄 憤る話を聞いて」を読んで

荒武俊子

満鉄の社員や軍部の人たちは一般の人々を置き去りにして……という投書を読んで、私達のこと知っていただきたくペンを取りました。

夫の家族は

私達夫婦は偶然ですが、幼いころ旧満州から引揚げてきた引揚者同士です。

夫の父は満鉄で働いていました。終戦時ヘルピンに住んでおり、義父は戦後まもなくソ連兵に連行されあまり遠くない炭鉱で働かされていたそうです。監視の目を盗んで脱走し、引揚げのため家族が日本へ出発する間際に帰ってきた時の様子を、聞いたことがあります。幼い子供3人を連れた義母は、どんなにうれしかったことでしょう。それから一ヶ月、無蓋車にゆられたり収容所で過ごしたりして、1946年9月、1

般の人々と同じように引揚者として帰ってきたのです。

私たち家族のたどった道

役人は早々と特別列車で引揚げた」という話もきます。

私の父は公務員で、終戦時、吉林に住んでいました。9月のまだ暑い日、ソ連兵がやってきてそのあたりの男性を軒並みトラックに乗せ連れて行ってしまいました。私は5歳でし

たがそのときの光景を今も覚えています。

母は5人の子供を抱え、それからの1年は本当に大変だったと思います。戦後私達の4部屋の家に、3家族住んでいました。その家もまもなく接収され、私達は知り合いの納屋に住むことになりました。14歳の姉は生活費を稼ぐため人形を作って売りに行き、危うくソ連兵に連れて行かれそうになったこともあったそうです。

1946年の夏ごろからいよいよ日本の引揚げがはじまりました。母と長姉は食料品を詰めた大きな荷物を背負い、11歳の次姉が1歳の弟を負い、7歳の兄と5歳の私は自分の着替えを入れた小さなリュックを背負うのが精一杯でした。夜中に無蓋車から下ろされ、道端に眠りこけてしまいそうになる私は「ここで眠ったら死んでしまうのよ」と母に叱られながら歩きまわした。お父さんのいる人はほとんど先に行ってしまうので、私達家族は、いつも最後にかなり心細い思いをしました。1946年9月18日博多に着いた時、兄は栄養失調でうまく歩けませんでした。それから3年、ソ連に連れて行かれた父が、ガリガリに痩せて帰ってきた

した。

奥地の開拓団で悲惨な目に会われた方に比べると、日本人がたたくさんいて、かばい合いながら暮らせた大きな街に住んでいた私達は、幸運だったと思います。でも、母は知り合いの中国人に、T人で5人も連れて帰るのは大変だからこの子を預かってあげよう」と言われたそうです。私と帰国者の方は、紙1重だったかもしれません。

ほとんどは命からがら

このように満鉄の社員も公務員もほとんどの日本人は敗戦の混乱の中、命からがら帰ってきたのです。

日本の敗戦をいち早く知って家財道具まで持つて引揚げたのは、極々ひとにぎりの特権階級だけで、ほとんどの人は何も知らされず、放り出されたのです。

義父は、正の連中がいなくなるのでおかしいな：と語っていた」と、その後話していました。私の父は幹部に近い立場にいたので、いろいろ情報が入っていたかも知れません。でもあの時逃げなかったことを、密かに心のよりどころにしていたような気がします。旧満州を守るはずの関東軍が私達を放り出して行ってしまった後、ソ連との国境警備の

ために奥地に残された兵士が沢山いて、ソ連に抑留されたり、民間人にまぎれて逃避行したりしていたと聞きます。

戦争を、正しく語り継ぎたい

戦争とは、そう言うものではないでしょうか？ 満鉄は……軍部は……と単純に言い切れないものがあります。歴史を正確に語り継いでこそ、教訓になると思っています。私達一般庶民は、戦争をして得することはなにもないのです。それなのに今戦争を容認するような空気が漂っています。

戦争を知らない世代が、自分とは関係ないことのように気軽に軍備を受け入れる風潮は本当に恐ろしいと思います。

そんな人に私は言いたい！ あなたは都合が悪くなったら、捨てられる側なのよ！

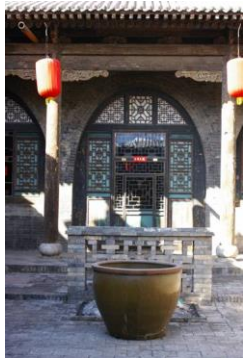
四合院の宿で

城門をくぐり、客引きのオツチャンやオバチャンの誘いをお断りして、次は宿探しです。

城内には「客棧」と呼ばれる宿が点在しており、それらは四合院という建築様式の古風な建物をそのまま宿泊施設にしたものです。私たちはすでにめぼしをつけていた「得客棧」という「客棧」に向かいました。ふらりと訪れた私たちを温かく迎え入れてくれ、女性オーナーが空いているいくつかの部屋を案内しながら、建築の特徴などを説明してくれました。

私たちはここに2泊することになりました。平遥の四合院は北京のものとは違う趣で、ヤオドンと呼ばれる洞穴式住居の名残りのなか、部屋の入り口はトンネルのようなアーチ状のデザインになっています。

部屋の中には今は形だけで使われてはいませんが、オンドルのベッドがあります。まるで映画のセットのような雰囲気で大感激！



一得客棧 客室の入り口

の珍しい麵料理の数々を堪能しました。

宿が決まって一安心、次は古城内の見学です。

平遥は交易などで財をなした山西商人の発祥地のひとつで、19世紀始めには、中国初の為替取引が行われた金融業誕生の地でもあります。町のシンボルである市楼を中心に、入り組んだ胡同(路地)と大小の住宅の壁、どこを見回しても、まるで時代劇のセットのような街並みで、さすがは世界遺産です。

気さくな人たち

でも人々には何の気負いもなく、普通に自分たちの生活を送っているようです。時間の流れさえも遅く感じられ、のんびりした引き売りの呼び声が聞こえてきたりします。

さほど広くない城内をブラブラ歩いていると、同一人物に2度3度出会うこともしばしばです。

昨日客引きで声をかけてきたオバチャンと今日手を振り合ったり、午前中訪れた博物館で言葉交わした青年と、また夕方街角で出合ったり。彼は「回生、二回熟。(初対面ときは知り合いじゃないけど、2回目にはもう友達)」だと言っていました。ここで1週間も暮らせば、町中の人と顔見知りになれるそうです。実際、町の人たちも、よく声をかけ合っているのを見かけました。

街歩き途中、Kさんの買い

物アンテナがピツと反応したのは、布靴のお店です。平遥は布靴が有名で、色とりどりの刺繍をほどこした布靴がずらりと並んだお店が何軒もあります。その中で、店先にミシンを置き、3人の職人さんが靴を手作りしているお店に入り、布靴の物色です。この道25年だという主人の布靴に関するうんちくを聞き、とどめの「布靴は夏でも絶対足が臭くならない」との力説にひかれ、私も購入してみました。臭くないのも魅力ですが、何層もの布を重ねて作られた靴底を持つ布靴の履き心地は素晴らしいのです。



布靴の職人さん

古都と北京

帰りは平遥駅前から、乗客がいっぱいになった時点で出発する太原行きのバスに乗りました。途中、張芸謀(チャン・イーモウ)監督の映画「天紅灯籠高高掛(邦題：紅夢)」の舞台となった「喬家大院」に立ち寄り、太原で「双塔寺」を見学し、空路北京に戻りました。

北京では次の日から始まる「全人代」のため、私たちが宿泊したホテルは物々しい警備体制になっていました。ホテルではエレベーターに乗る時は、毎回金属探知機を通らなければなりません。改めて「首都」であることを感じ、平遥の「のんびりムード」が早くも懐かしく思えました。

おわり

古都 平遥、山西をたずねる



街の中心にそびえる市楼

私の小さな旅日記 ②

語菰

その晩、停電に見舞われ蝋燭の明かりで過ごしましたが、それが更に「いい感じ」なのです。この客棧は食堂の料理もとても美味しく、Yさんの目じりは下がりっぱなしです。もちろん残り2人も。素朴で親切なサービスを受け、山西ならではの